

珠玉への道

令和2年度 第1号

令和2年12月23日(火)

道徳教育の各学年目標

本校は、昨年度から引き続き、道徳教育に力を入れ、取り組んでいます。

コロナ禍による4月・5月の休校、6月からの分散登校、そして7月からの一斉登校と昨年度とは大幅に異なる形ですが、感染症対策をしながら学校は再開され、間もなく2学期が終わります。こうした中で、道徳教育においては昨年度の学年目標を基に一部修正する内容で決定していましたが、皆さんにお知らせする機会が遅くなり申し訳ありませんでした。さて、各学年目標は以下の通りです。

- 1 学年
 - ①できること、できないことを理解し、自分の良さを伸ばす努力をする。
 - ②多様な他者を認めて、思いやりと誠実な気持ちを大切にし、よりよい人間関係を築く。
- 2 学年
 - ①今なすべきことは何かを自ら考え、行動し、自主自立の精神を身につけることで、自信を持って集団の中での自己の役割を果たす。
 - ②社会参画や勤労意識を高め、社会規範・規律の大切さを学ぶ。
- 3 学年
 - ①玉高チャレンジプランの活動をとおして身につけた力を発揮して課題解決に取り組む。
 - ②社会を支える一員としての自覚を持ち、社会貢献と自らの幸せを考えられる人になる。

いかがでしょうか。これらの目標を学校生活はもちろん家庭においても、自らだけでなく他者・集団・社会に関わる中で意識し、行動することが道徳の実践につながり、日々の生活を充実させることにもなると思います。

道徳教育に関わる各学年での取り組み

昨年度は道徳に関わる様々な行事がありましたが、今年度は新型コロナウイルス感染防止の観点から、多くの行事が中止や延期となり、全学年での活動はほとんどできませんでした。しかし、そうした行事に代わり、各学年ごとに特色ある道徳的活動を10月から始めることができました。

1 学年は、「玉だん～思いやりで乗り越えよう～絆プロジェクト」という名称で、被災地における避難所で使用するパーティション制作を行いました。このプロジェクトの目的は、パーティション制作から、集団内での役割を理解して、できること・できないことを分別し、他者と協力する姿勢を育成することと、多様な他者を認めて、思いやりと誠実な気持ちを大切にし、よりよい人間関係を築く力を育成することです。このプロジェクトには学校評議員の真木さん・



蔵前産業（株）の大原さん監督の下、玉村町役場や地元企業メディカル・ベアの協力もあり、上毛新聞や群馬テレビからも取材を受けました。全16時間にわたる実施計画のもと、10月中の4時間で「東松山市からのメッセージ」の動画から、各班ごとに「被災地に必要なことは何か」を考え、発表を行い、そうした被災地で必要なパーティションの作成方法を学び、プロジェクト成功の見通しをたてました。また、11月中の6時間では、実際に各班でパーティション制作のため、ダンボールを裁断し養生テープを使用して土台を作成したり、組み立てたあと外側の装飾などを行いました。

2学年は日本史Aの時間を利用し、「しあわせになる道徳の言葉」という名称で、生徒一人一人が道徳に関わる格言を自ら考えたり、偉人たちが遺した格言から候補を挙げてもらいました。特に、人との関わりに関することや、集団や社会との関わりに関する格言を重視してもらいました。その後、各クラスの道徳推進委員が4作品を選定し、最終的に各クラス2作品を投票で決定しました。そして、道徳に対する意識を喚起するため、1作品を教室に、もう1作品を生徒玄関に掲示しました。生徒玄関への掲示に関しては、始業式や終業式の校長先生の式辞からも格言を引用し、さらに公仕の瀬間さん、司書の織茂さんのご協力により、とても素晴らしいものができあがりました。



3学年は世界史Aの時間を利用して、2学年が行った「しあわせになる道徳の言葉」の他に、「カースト制度について考えよう！」という名称で、インドの社会身分制度について学びました。このテーマ学習の目的は、カースト制度を通じて多文化との共生や相互理解の精神を育てること、また、グループでの活動において自分の考えや意見を相手に伝える力を身につけることです。50分という限られた時間の中で目的の全てが達成できたとは言えませんが、多くの生徒がインドの実情を知ることによって道徳的価値について多面的に考え、理解を深めることができました。特に、ワークシートの自分の意見を述べる部分では、多くの生徒がアウトカーストに対する差別に憤りや悲しみを感じ、どうすれば差別は無くなるのかと思い悩む様子が伝わりました。



道徳教育がめざす生徒の姿

昨年度から道徳教育に力を入れている玉村高校にとって、嬉しいニュースがあります。11月19日（木）の朝、玉村町に在住の高齢男性が道で倒れて起き上がれないところ、本校2年A組のコラル セバスティアン君とバルガス レオナルド君が通学途中でその現場に直面し、協力して救助しました。翌日、その高齢者の方はお孫さん夫婦とともに来校し、2人の生徒に直接感謝の言葉を伝えてくれました。2人のこの行動は玉村高校の校訓「誠実」「勇気」「奉仕」の実践であり、道徳的实践として大変素晴らしいものでした。是非、他の生徒の皆さんも2人の行動を模範とし、他者に対して自分のできることをやってみましょう。